



長野市立博物館
NAGANO CITY MUSEUM



博物館だより

Nagano City Museum

第119号

第64回
特別展

さぶつひじり たんせい は えんくう もくじき
信州ゆかりの作仏聖—弾誓派から円空・木喰へ—

令和3年10月2日～11月28日開催



大幸作 観音菩薩立像（長野市 個人蔵）

千体、万体と多数の仏像を造ることで、庶民を救い、また自らの修行とした作仏聖たち。^{さぶつひじり}
江戸時代に活躍した、長野県内ゆかりの作仏聖による仏像を紹介する展覧会です。

第一部 作仏聖彈誓派

一 彈誓

室町時代の終わりから江戸時代にかけて活動した作仏聖の一派である彈誓派。彈誓派は彈誓^{たんせい}（1551か52-1613）を祖とする念仏聖の集団で、長野県内に多くの寺院を建立、また中興し、多数の仏像を造ったことが知られています。

彈誓派による作仏の始まりは初祖彈誓だとされま
す。尾張国（愛知県）に生まれた彈誓は、39歳頃
佐渡檀特山で修行し、46歳頃阿弥陀如来より「十
方西清王法光明満正彈誓阿弥陀仏」という称号を
授かって阿弥陀如来となったとされます（図1）

その後越後（新潟県）を經由して信州に入り、各
地で念仏を弘め、寺院を建立しました。

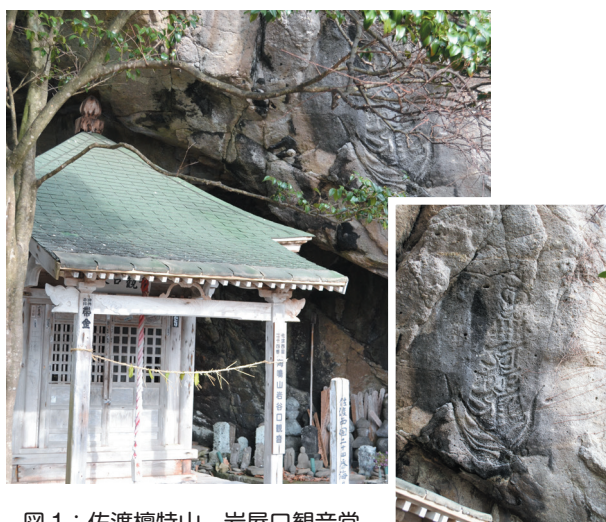


図1：佐渡檀特山 岩屋口観音堂

彈誓の作仏については、伝記に、神奈川県伊勢原
市の一之沢浄発願寺の洞窟で桜の木から自刻像を彫
り出そうと斧をふるったところ、木から熱い血が流
れだし、途中で彫るのをやめたという伝説が書かれ
ます。

また京都府大原の古知谷阿弥陀寺の洞窟では、訪
ねてくる木こりたちに、鎌で彫った鎌仏と呼ばれる
阿弥陀如来像を与え、付近の民家や阿弥陀寺に伝
わっていると書かれます。

特に、古知谷阿弥陀寺に伝わる鎌仏については、
頭部には彈誓の花押、右袖側側面に「十方西清王」、
前面に「法光明佛」、背面に「南無阿弥陀佛」と
書かれ、彈誓が佐渡修行中に阿弥陀仏から授かった

1 ※本展では彈誓の読みを「たんせい」に統一しました（五
来重「塔の峰本『彈誓上人絵詞伝』による彈誓の伝記と宗
教」〔箱根町史編纂委員会編『箱根町史』第3巻、角川書店、
1984年〕による）。

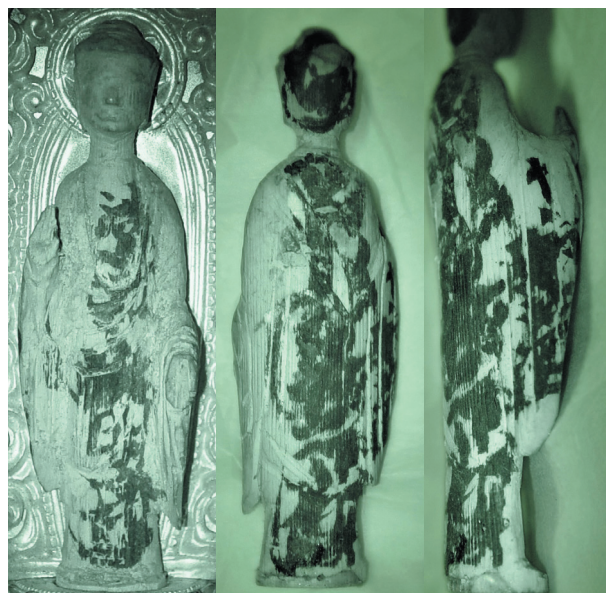


図2：彈誓作 鎌仏（阿弥陀如来立像）（京都 古知谷阿弥陀寺）

という称号が書かれているものと思われます（図2）。

この鎌仏は像高が9.8cmととても小さいですが、
右手の施無畏印と左手の与願印が的確に表され、衣
のひだも細かく表現されています。本像を彈誓が
彫ったかどうか確かめるすべはありませんが、おそ
らく仏像を彫ることに手慣れた弟子などが造ったも
のに彈誓が墨書を施したものと思われます。

絵画でも同様のことがみられ、長野県飯田市の阿
弥陀寺に伝わる伝彈誓筆善導大師絵像は、中央に描
かれた善導大師^{ぜんどうだいし}の周囲に、彈誓^{たんせい}が花押^{かおう}を書いたもの
です（図3）。花押は「一心」（諸説ある）と書いた
周囲を丸で囲んだもので、周囲の丸を大きく書き善
導大師を包み込んでいます。彈誓^{たんせい}の名号や花押（御印文、
御手判）は複数確認されて
いて、大小合わせて生涯に
400万枚書いたとも伝えら
れます。本絵像の花押は彈
誓の自筆ですが、おそらく
絵は別人の手によるもの
でしょう。

彈誓が自ら仏像や仏画を
造ったことが事実として
あったのかわかりませ
んが、仏像や仏画に自
筆を加え信者に施した
ということからは、こ
うした造形物を宗教活
動の中で重視していた
と考えることができる
でしょう。こ



図3：伝彈誓筆善導大師
絵像（飯田市 阿弥陀寺蔵）

うした弾誓の活動が弾誓派二世の但唱以降に見られる積極的な作仏の発端となり、弾誓の伝記に斧や鎌で作仏したという物語が加わることとなったのではないかと想像されます。

二 但唱

弾誓派二世但唱^{たんしょう}(1579か81-1641)は摂津国(兵庫県)に生まれ、伝記では16歳頃佐渡に渡り弾誓の弟子となったとされます。一説に、但唱は元仏師であり、何事かに連座し磔になったものを免れて出家したとされます。「江戸松物町に居住いたし候仏師の又七」が但唱の出家前の本名であることも記され、但唱の前身は仏師であったと考えられています。

事実但唱は多くの仏像を彫ったことが分かっています。伝記には、信州亀倉村(須坂市亀倉)の靈光山万龍寺を建立し、初めて千体仏を造り、その後越後米山の安楽寺に千体仏を造ったと書かれます。その他計13か所に1万3千体の千体仏を造ったとされます。

須坂市亀倉の萬龍寺に但唱が造ったと伝わる千体地蔵菩薩像が伝存しています。願をかけて1体ずつ持ち帰られたことにより、現在但唱作と確認される地蔵菩薩像は14体ですが、いずれも首を明瞭に表さず頭部を前に突き出したなで肩という独特の姿勢に表されます(図5-1)。背面には1人あるいは



図5-1

但唱作 千体地蔵のうち(須坂市 萬龍寺蔵)



図5-2

2人の名前が陰刻されているものがあり、但唱の勧進に応じた人々の名前だと想像されます(図5-2)。

他に木彫仏では、但唱が開いたとされる駒ヶ根市安性寺に但唱作の本尊阿弥陀如来坐像が伝わっていて、同じくなで肩に但唱の特徴が表されます。同じ様式の石仏が京都市蓮華寺の五智如来像で、背面に「作但稱(花押)」と刻まれます。また、東京都養玉院如来寺の石造地蔵菩薩立像など、他にも但唱の名前が刻まれた石仏が確認されていて、但唱が各地で仏像を造ったことが知られています。

但唱は絵も描いたようで、諏訪市正願寺に紙本墨描きの阿弥陀三尊来迎図が伝わっています。左下に「帰命佛(花押)」と記され、但唱筆だということが分かりますが、阿弥陀三尊の頭部を突き出したなで肩の姿勢が彫刻と共通しています(図6)。

このように、13か所の千体仏に加えて、各地に造った仏像を合わせて2万體になったことを記念して、江戸如来寺に五智如来の大仏を造立しました。信州下伊那郡山吹村横沢山(松川町)の山中で、感悦、林貞、教念の3人の弟子が助手となり完成させたと伝わります。

但唱が実際にどれほどの仏像を造ったのかは明らかではありませんが、但唱作と考えられている伝存作例の多くは石仏です。また安性寺の木造阿弥陀如来坐像^{ちようがん}は彫眼(彫って目を表すこと)の一木造であり、まるで石仏を造るように木から像を彫り出しているとも考えられます。千体仏は元より一木造です。木造で但唱作が確実な作例が少ないので一概には言えませんが、但唱は造像の技法が単純な分、かえって頭部を前傾させたなで肩の特徴的な姿勢が際立ったとも考えられます。

それに対して、如来寺の巨像を手伝った弟子の林貞による但唱肖像が養玉院如来寺に伝わっていますが、寄木造で玉眼^{ぎよくがん}が嵌められています。こう

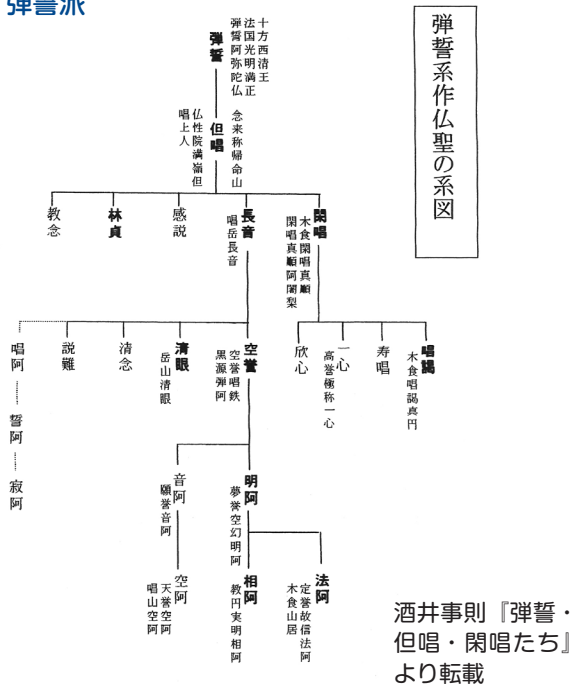


図6: 但唱筆 阿弥陀三尊来迎図 (諏訪市 正願寺蔵)

した寄木造の構造に通じている弟子たちの助力を得て、如来寺の大仏は完成したのでしょうか。また、玉眼や漆箔（仏像表面に漆を塗り金箔を貼ること）などの専門的な技法を使うことができるのも、弟子の中かあるいは身近にいたと考えられます。

こうして、多くの作仏を行った但唱の周りに仏像制作に長けた弟子たちが集い、弾誓派三世の長音、あるいは三世閑唱以降になると、本格的に各地の寺院を開山中興し、本尊を造立していくこととなります。

三 弾誓派



信州には弾誓派が関わった寺院が数多くあります。松本市念来寺は三世長音の開山で本尊も長音により造立されました。長音は幼少時佐渡に住んでいて、そこで弾誓や但唱のことを知ったとされます。佐渡を出た長音は18歳の頃虫倉山にいた但唱に弟子入りし、その年元和5年（1619）に藩主より寺地の寄進を受け松本市下横田に念来寺を開山しました。弾誓派五世明阿の代に寺地が広がり、明阿によって両脇侍の観音勢至菩薩が造立されました。明阿は像高約3.15mの巨大な延命地藏菩薩坐像も造立しています。

弾誓派六世相阿は念来寺に巨大な釈迦涅槃図を遺しています（図7）。裏に十方信男信女を施主として奉納されたことが記され、庶民の勧進・寄附によって制作されたことが分かります。

このように念来寺は弾誓派の代々にわたって境内が整備され、庶民の信仰を支える仏像・仏画が整え



図7：釈迦涅槃図（部分 松本市 西善寺蔵）

られてきましたが、明治の廃仏毀釈で鐘楼を残して堂舎は破壊されてしまいました。しかし寺宝は松本市内の和田境にある西善寺に運ばれ、今も西善寺で守り伝えられています。

松本市百瀬の正念寺は弾誓開山と伝わり、正念寺五世住阿の時に念来寺住職を辞した明阿が中興を助けました。享保9年（1724）明阿は本堂を再建し、相阿が本尊阿弥陀三尊像を造り（図8）、明阿は地藏菩薩立像を造りました。相阿による阿弥陀三尊像の胎内納入札から、相阿が彫刻し、住阿が願主であったことが記されます。ここから、弾誓派は自ら開山・中興した寺院以外にも、作仏の技術を活かして、頼まれて仏像を造ったことが分かります。正念寺の明阿作地藏菩薩立像と相阿作阿弥陀三尊像は弾誓派の



図8：相阿作 阿弥陀三尊像のうち阿弥陀如来坐像（松本市 正念寺蔵）

白眉とも言える美しい仏像で、弾誓派あるいは弾誓派が抱える仏像制作の集団が相当の技術を有していたことがうかがえます。

弾誓派が頼まれて自身が住職ではない寺院を中興したことは、弾誓派六世法阿（山居）にも見られます。山居は明暦元年（1655）松本市里山辺新井に生まれ、13歳頃念来寺の明阿の弟子となり、29歳頃虫倉山に籠り修行したと伝わります。背面に「千之内」あるいは「万之内山居作」と記された一木造の小像が長野市の山間部に多く残されていて、山居が1千体、あるいは1万体を目標して作仏したことが分かります。中に「空幻和尚為也」と記されたものがあり、師匠の空幻明阿の為として造られたものもあることが分かります。弾誓派の聖として、造像は師の明阿から学んだのでしょうか。

元禄6年（1693）、虫倉山で修行していた山居は、頼まれて小川村高山寺の三重塔再興に助力することとなります。まず観音堂の阿弥陀如来立像を造立し、勧進のための結縁本尊としました（図9）。勧進によって結縁（寄附）した人々の名前が奉加帳にびっしりと書かれて、阿弥陀如来立像の胎内に納められ

ていました。こうして十万人講を結成し元禄11年（1698）三重塔の落慶供養が行われました。三重塔に納められた棟札には、落慶供養の導師は高山寺の本寺である専照寺の知栄、別当は高山寺の秀栄、願主が山居だと書かれます（図10）。また勧進は高山寺の付近の村の肝煎なども中心的に関わって進められたことが分かっています（詳しくは本展図録に掲載の「木食関係史料の紹介」を参照）。

山居は阿弥陀如来立像の胎内に納められていた勸化状に、自身のことを「法国光明弾誓上人」の「第六世末弟」であり、虫倉山で「木食単衣」を行い、ただ「称名念仏」を実践していたと書いています（図11）。ここからは、弾誓派はあくまで木食行（五穀あるいは十穀、火食、肉食を断つ）を実践する行者なのだという思いをうかがうことができます。

自らは修行者だという自負とともに、弾誓派には弾誓、但唱より脈々とつながる作仏への執着とそれに伴う技術の継承があり、民衆の信仰を支えるために、各地の荒廃した寺院を自ら再建し、また頼まれて仏像を造立したことが、弾誓派を作仏聖の集団という特異な存在として位置付けています。



図9：山居作
阿弥陀如来立像（小川村 高山寺蔵）

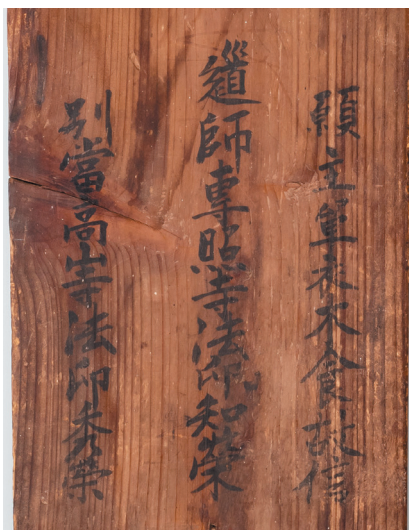


図10：三重塔棟札（部分 小川村 高山寺蔵）

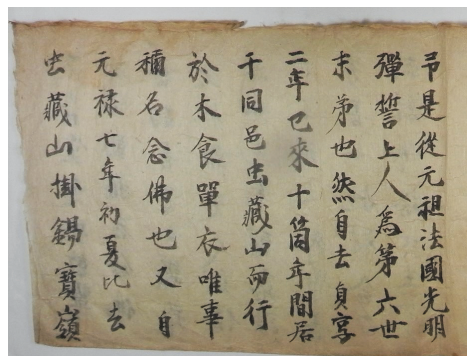


図11：山居筆 勸化状（部分 小川村 高山寺蔵）

第二部 円空と木喰

一 円空

円空（1632-95）は、美濃国（岐阜県）に生まれ、32歳で初めて仏像を彫ったとされ、その後各地を遍歴しながら仏像を造りました。64歳で入定するまで、生涯に12万体を彫ったとされます。

信州における円空の足跡は、木曾地域に多く残っています。南木曾の沼田にある岩戸の窟が修行地だったと伝わり、窟下の楯守神社に十一面観音菩薩坐像が伝わっています。南木曾には複数の作例が伝存していて、3体の円空仏が伝わる等覚寺には、天神坐像と弁財天十五童子像（図12）が元々祀られていたそれぞれの祠の棟札も現存し、貞享3年（1686）に造営されたことが書かれるため、この頃円空が南木曾周辺を訪れたと想像されています。

また、南木曾町川向区所蔵（南木曾町博物館寄託）の厨子入聖観音菩薩坐像に見られる、裳裾を裳掛座に長く垂らした表現は、美濃地方を中心とした寛文後期（1670年頃）の作例によく見られるものであることから、円空が貞享3年の他にも何度か木曾路を通過しては作仏し、当地に遺していったことが想像されます。



図12：円空作 弁財天十五童子像
（部分 南木曾町 等覚寺蔵）



図13：円空作 聖観音菩薩立像 像底
（松本市 浄林寺蔵）

円空が木曾を訪れた理由には御嶽山登拝もあったとされ、黒沢口登山道にも円空仏が伝来しています。

円空と弾誓派に直接のつながりは見られませんが、松本市浄林寺の聖観音菩薩立像には像底に「単誓上人作／潮音（花押）」と書かれ、後世に作仏聖の祖弾誓に仮託されたものと想像されています（図13）。明確に首が表されず丸顔が浮かんだような表現は、延宝8年（1680）銘の茨城・月崇寺像と共通していて、円空がこの頃にも信州を訪れたと考えられます。

その他に上田市にも円空仏の所在が確認されていて、円空が何度か信州を訪れたことが分かります。

二 木喰

木喰（1718か28-1810）は、甲斐国（山梨県）に生まれ、45歳で木食戒を受け廻国を始めたとされます。61歳頃初めて仏像を彫り、その後全国を歩きながら仏像を造りました。90歳の時に千体を成就し、さらに二千体を発願しましたが、93歳で入寂したと伝えられます。

木喰は64歳の時に佐渡に渡り木食行者の先駆者である弾誓のことを知ったとされ（弾誓を慕って渡島したとも）、弾誓ゆかりの聖地である檀特山釈迦堂を再興しています。釈迦堂はその後再び荒廃し、現在は麓の清水寺に遺品が伝わっています。

佐渡では個人宅にも木喰作の仏像や仏画が多数伝わっていて、釈迦堂再興などの助力者にお礼として施与されたものだと想像されています。佐渡市の個人宅に伝わる「図入利剣名号」は、六字名号の下に垂髪の人物が描かれていて、弾誓の肖像画だという説があります。

銘文や宿帳など木喰が記したもののの中に弾誓に関する記述がないので、木喰と弾誓を確実に結びつける証拠はありませんが、木喰89歳の時の霊夢に阿弥陀三尊が現れ「神通光明明満仙人」の号を与えられたということは、弾誓が阿弥陀仏から与えられた「十方西清王法国光明満正弾誓阿弥陀仏」から出ていると考えられていて、木喰が弾誓を追慕していたことは想像に難くありません。

佐渡を出た木喰は一旦故郷の丸畑に戻り、信州を訪れます。木喰は生涯の中で度々信州を訪れていますが、これが最初の造像を伴う訪問でした。この時期の作例が富士見町に伝わっていて、八ヶ岳の長い裾野の中程、見晴らしのよい法隆寺観音堂に祀られてきました。像種は木喰仏では現存唯一の普賢菩薩



図 14：木喰作 普賢菩薩騎象像
(富士見町 乙事区蔵)

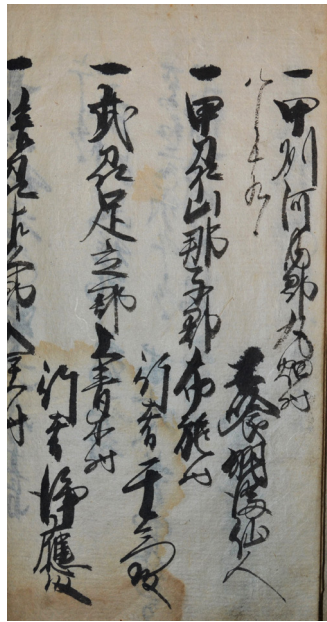


図 15：木喰他筆 御廻国中御宿控帳
(部分 岡谷市 個人蔵)



図 16：木喰作 拝滝不動明王立像
持物 (岡谷市 中屋区蔵)

で象に乗った姿に表されます(図14)。天明6年(1786)木喰69歳の作で、瞑想的な表情が初期の木食行道時代を代表する作例とされています。

各地で造像しながら廻国し丸畑に戻った木喰は、ここで生涯最大の群像となった四国堂八十八体を制作し(その内の1体が縁あって善光寺大本願に所蔵されています)、享和2年(1802)85歳でまた信州を訪れます。

この時は諏訪湖の北の方を訪れていて、下諏訪町や岡谷市に複数の作例を遺しています。岡谷市長地には昵懇の御嶽行者がいて、ここには少なくとも3回にわたって立ち寄っています。享和2年、文化3年(1806、89歳)、文化4年(1807、90歳)の銘が書かれた作例があり、訪れる度に逗留のお礼(記念?)として作仏したのだと想像されます。当家には「御廻国中御宿控帳」と書かれた帳面も伝わっていて、御嶽行者普寛、普寛の高弟泰賢の名前に続いて、「木食明満仙人」と自著されます(図15)。当家が様々な廻国行者が立ち寄る場所であったことが分かります。

文化3年銘の西宮大神宮(恵比寿神)像はその前に造られた享和2年銘の大黒天像とほぼ同じ大きさで(総高38.5cmと37.0cm)、前に造った大黒天像と一対にしたものかと想像されます。両像とも頬を高く満面の笑みに表され、当家の繁栄を祝って造られたのでしょうか。

文化3年には同じ長地の不動堂で拝滝不動明王立像を刻んでいます。本堂は元行屋で行者が立ち寄る場所であったとされます。本像は長らく秘仏となっていたため、木喰が施した当初の彩色が色鮮やかに残されています。持物の剣の裏には木喰筆で不動明王の種字「カンマン」(不動明王を梵字1字で象徴したもの)が墨書されていて(図16)、この小さな剣も含めて当初の姿が完全に保存されている貴重な作例です。憤怒の表情、赤く渦巻く火炎の表現は木喰の代表作といえるでしょう。



図 17：木喰作 阿弥陀如来立像
(部分 下諏訪町 慈雲寺蔵)

最後に信州を訪れたのは文化4年、木喰90歳の時です。同じく長地の中村薬師堂に安置される寶頭盧尊者坐像は、関連する文書から文化4年の作であることが分かっています。本像は人々になでられたらしく表面が摩滅していますが、背面にかすかに「大工」という墨書を読み取ることができます。また、下諏訪町慈雲寺の阿弥陀如来立像は、背面墨書から文化4年9月の作であることが分かり、ここにも「大工カセイ/清七郎」と書かれています(図17)。これは高齢の木喰の造像を助けて荒木取りなどを手

伝った人物だと考えられています。本像には近隣9村の人々の名前も記され、当地における木喰の名声の広がりを見ることが出来ます。

木喰最後の作は甲府市教安寺の七観音像で、文化5年(1808)の銘が書かれていたとされますが、空襲で焼失したため、慈雲寺の阿弥陀如来立像が現存最晩年の作ということになります。このように信州では、初期から最晩年まで木喰の造像をたつぷりと堪能することができます。

第三部 善光寺大幸

善光寺大幸が彫った仏像は、昭和47年(1972)に信濃美術館(現長野県立美術館)で開催された「木喰僧の彫刻展」で初めて紹介されました。長野市の山間部である鬼無里や戸隠で多く発見され、山居仏の所在地と重なることも多く、中には山居仏として伝わったものもあったため、当初は「山居の初期仏」として紹介されました。端正に整えられた山居仏とは異なる荒い彫りが、彫刻に慣れる以前の初期の作と考えられたのでしょう。

その後、表面についた真っ黒な煤が洗われた像の背面に「善光寺大幸」の墨書があることが分かり、作者の名前という可能性もあるものの、善光寺を寿ぐ言葉かとも想像されました。

この度、展示の事前調査で赤外線撮影したところ、大幸作と思われる像の大半に同じ背面墨書を確認することができました。その中に「大幸」とのみ書かれたものがあったため、「大幸」は名前で、「善光寺」は善光寺を拠点に活動する善光寺聖であることを示していると考えられます。

さらに、長野市若里・仏導寺に伝わった4体の大幸像のうち1体の背面右肩の辺りに「寛政五丑歳八月日」と墨書されることが分かり、寛政5年(1793)頃に活動した人物であることが分かりました(図18)。

大幸が造るのは未敷蓮華を持つ観音菩薩と合掌仏(地藏菩薩か)だけで、ほとんどが立像です。坐像は長野市小島田町・野田公会堂に伝わる1体のみですが、膝高が低く小さく表された脚は、全体からするとアンバランスで両脚を組む表現に苦労したことが想像されます。

約三頭身のすんぐりとした体形、角張った仕上げ、眉と鼻梁がつながり上瞼のみで表された目、半開きの口、大きな耳(多くがD型)など、素朴な造りながら、一見して善光寺大幸だと分かる特徴があり、その個性を主張しています。

現在のところ長野市山間部以外に長野市平野部、さらに松本市梓川でも所在が確認されていて、当初考えられていた以上に活動範囲は広そうです。今後さらに大幸作例の確認が進めば、人物像が明らかとなるでしょう。(竹下 多美)



図18-1：大幸作 合掌立像
(長野市 仏導寺蔵)



図18-2：右肩部、
赤外線撮影

博物館だより 第119号

発行日2021年9月30日

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414

TEL:026(284)9011

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400

TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659

TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3

TEL:026(262)3500

ミュゼ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1

TEL:026(262)2500